

たかお
高尾A遺跡 現地説明会資料

(一財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

1 遺跡の概要

高尾 A 遺跡は佐久平の千曲川左岸、佐久市前山高尾に所在します。遺跡は倉沢川北側の丘陵上にあり、南向きの緩やかな斜面に立地しています。日当たりが良く、遺跡からは野沢や中込などの佐久市街地が一望できます。遺跡の標高は 730~770m です。

高尾 A 遺跡は弥生時代から平安時代の遺物散布地として知られていました。当センターが平成 21 年度に実施した確認調査で旧石器時代の石器が見つかり、平成 23 年度に旧石器時代の石器群の本発掘調査を行いました。

本年度は、平成 23 年度の調査で見つかった竪穴住居跡などに加え、今回新たに発見された古墳の調査を行っています。

2 縄文時代の竪穴住居跡

緩やかな傾斜地で見つかったこの竪穴住居跡は、耕作地の造成等によって削平され、壁と床の一部が失われていました。住居跡の平面形は隅丸方形すみまるほうけいに復元され、床残存部は長辺約 4.4m、短辺約 2.9m を測ります。壁の高さは、最大で約 70 cm 残っています。床には、炉跡とみられる焼土面や 2 基の柱穴が認められます。

遺物は、縄文土器の破片、たたき石や黒曜石製の矢じりなどの石器のほか、耳飾りが出土しました。この耳飾りは、玦状耳飾けつじょうみみかざりと呼ばれ、縄文時代前期の代表的な装身具とされます。これらの出土遺物から、この竪穴住居跡は、縄文時代前期前半(約 6,500 年前)のものと考えられます。



竪穴住居跡



玦状耳飾

3 新発見の古墳

古墳は耕作地の造成等によって破壊されていたものの、墳丘やその周囲をめぐる周溝が残存しており、内蔵された横穴式石室も確認できました。古墳は復元直径9m程度の円墳で、墳丘の裾近くには石列がめぐっています。周溝は最大幅が約3mを測ります。

南に出入り口を設けた横穴式石室は、側壁に組み込まれた縦長の石材(立柱石^{りっちゅうせき})によって、石室内の空間を玄室(遺体を安置する部屋)と羨道(玄室と外部を結ぶ通路)とに分ける構造で、玄室は中ほどで幅が最も広くなる「胴張り^{どうば}」と呼ばれる形態を有しています。玄室は長さが2.1mで、幅は奥壁部分が0.9mを測るのに対し、玄室の中ほどでは1.3mとなっています。石室は天井をはじめ上部が失われているため、高さは70cmしか残っていません。羨道は残存長1.5mを測りますが、側壁の大部分が失われています。石室の周囲には多量の川原石を用いて裏込め^{うらご}が施されています。

石室の構造や規模からみて、本古墳は7世紀後半～8世紀に築かれたと考えられます。

遺物は周溝内と石室内から土器が少量出土しただけです。周溝内から出土した須恵器^{すえきつき}坏などは古墳の築造や追葬に伴う可能性があります。一方、石室内出土の土師器^{はじきつき}坏は平安時代のもので、後世に祭祀や埋葬などの場として石室が再利用されたことも考えられます。

高尾A遺跡の近くには、高尾1号墳・2号墳という2基の古墳があります。しかし、いずれも内容はよくわかっていません。今回みつかった古墳は、本遺跡周辺の古墳時代のような考えの上で貴重な資料となるでしょう。



古墳全景



墳丘と石列

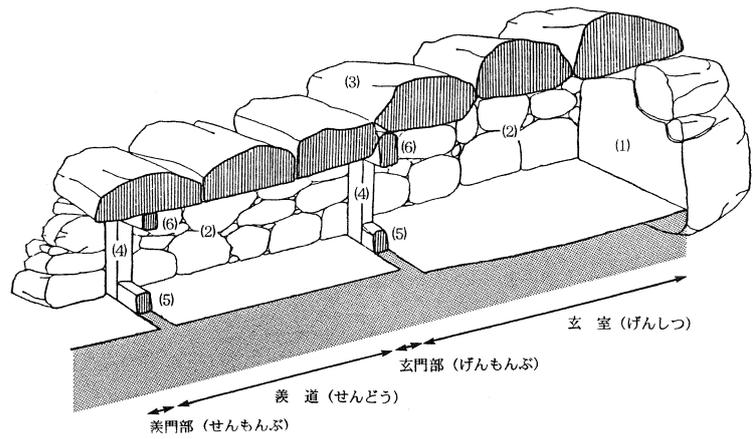


横穴式石室

石室後方に石列が見える

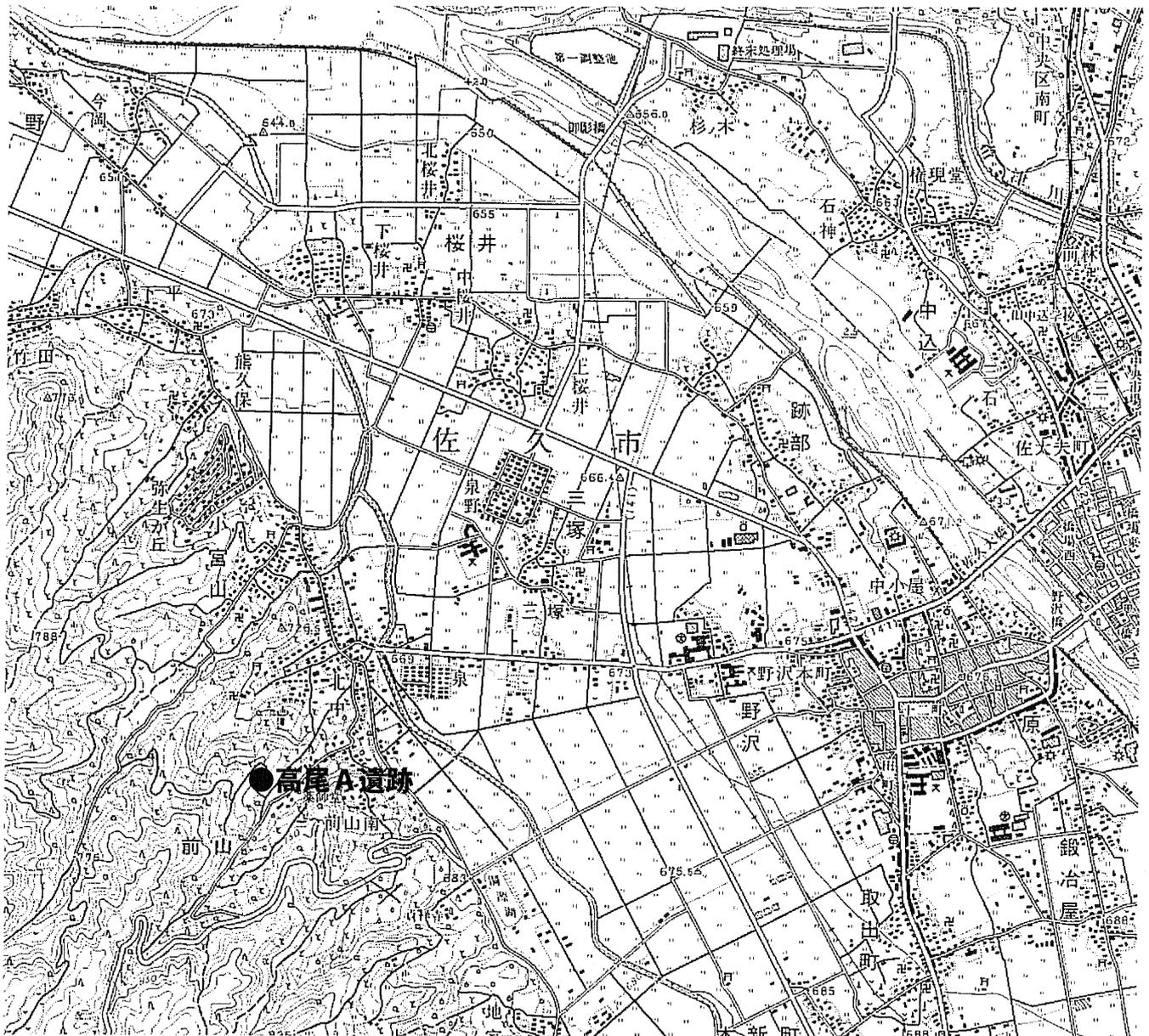
● 横穴式石室

- (1) 奥壁 (おくへき、鏡石)
- (2) 側壁 (そくへき)
- (3) 天井石 (てんじょういし)
- (4) 袖石 (そでいし、立柱石)
- (5) 框石 (かまちいし、しきみいし)
闕石 (しきみいし)
- (6) 楣石 (まぐさいし)



横穴式石室の名称と部位

出典：『長野県考古学会平成8年度秋季大会』資料からの転載



高尾A遺跡の位置 (国土地理院発行2万5千分の1地図 臼田より)

